

## プリアモスの説得の試み

— Iliad 22.56–76 —

平野智晴

本論は、ホメーロス『イーリアス』第22歌56–76行におけるプリアモスの説得の試みについて、背景となる文学的伝統を踏まえて再考するものである。当該箇所における解釈上の問題は、およそ以下の通りである。

叙事詩も終盤に差しかかり本歌に至って、遂に、ヘクトールとアキッレウスの一騎打ちが果たされることになる。青銅の武具を煌めかせイーリオンの都へと走って来るアキッレウスに気付いたプリアモスは、迎え撃とうと気負い立って城門の前に立つヘクトールに対して、戦わずに城壁の中に入るよう懇願する。王は、老いた我が身に降りかかるであろう惨めな最期を思い描いてみせることで最愛の息子に戦いを断念させようとするのであるが、それにもかかわらず、その締め括りの言葉にはいささか奇妙な響きが残るのである\*1:

... νέω δέ τε πάντ' ἐπέουικεν  
ἀρηϊκταμένω, δεδαϊγμένω ὀξείῃ χαλκῶ,  
κείσθαι πάντα δὲ καλὰ θανόντι περ, ὅττι φανήη·  
ἀλλ' ὅτε δὴ πολίον τε κάρη πολίον τε γένειον  
αἰδῶ τ' αἰσχύνωσι κύνες κταμένοιο γέροντος, 75  
τοῦτο δὴ οἴκτιστον πέλεται δειλοῖσι βροτοῖσιν.  
(Hom. Il. 22.71–76)

……若者であれば誰であれ見栄えがするものだ、戦いで殺されて、鋭い青銅の剣によって切られて倒れることは、死んでも全てが立派なのだからな、目に映るものは何であれ\*2。だが、討たれた年寄りの白髪と白髭と恥部を犬どもが辱めるとき、哀れな人間にとって、これより惨めなことはないのだ。

「若者であれば誰であれ見栄えがするものだ。死んでも全てが立派なのだからな、目に映るものは何であれ」——たとえ直後の老人の無惨な死と対比されるものであった\*3としても、これが後代の読者に、解釈次第ではヘクトールに死ぬことを勧めているようにも

\*1 ホメーロスのテキストは、Monro & Allen に拠る。

\*2 ὅττι φανήη は、「彼の身に起こることは何であれ」という意味にも解釈しうるが (Leaf, p. 436, ad v. 73)、筆者は、「(彼の遺体について) 見られるものは何であれ」という、従来からの意味を採る (Richardson, p. 114, ad v. 73. cf. Murray & Wyatt, p. 457)。

\*3 Richardson, p. 113, ad vv. 66–76; de Jong, pp. 75–76, ad vv. 71–6.

見えかねない、どこか場違いな印象を与えてきたことは否定できない\*4。むろん、プリアモスの説得の試みが必死なものであることは、これに先立つ箇所でアキッレウスと戦わないよう懇願していることから明らかである：38-41 Ἔκτορ, μή μοι μίμνε, φίλον τέκος, ἀνέρα τοῦτον | οἶος ἀνευθ' ἄλλων, ἵνα μὴ τάχα πότμον ἐπίσπης | Πηλεΐωνι δαμείς, ἐπεὶ ἦ πολὺ φέρτερός ἐστι, | σχέτλιος, 56-58 ἀλλ' εἰσέρχαιο τείχος, ἐμὸν τέκος, ὄφρα σαώσης | Τρωάας, καὶ Τρωάας, μηδὲ μέγα κῦδος ὀρέξῃς | Πηλεΐδῃ, αὐτὸς δὲ φίλης αἰῶνος ἀμερθῆς.\*5 しかし、それでも、この箇所はテュルタイオスの若者に戦いを勧める一節と類似していることが知られているのであり、この「どこか場違いな印象」には全く根拠が無いと決め付けるわけにもいかない\*6：

αἰσχρὸν γὰρ δὴ τοῦτο, μετὰ προμάχοισι πεσόντα  
 κείσθαι πρόσθε νέων ἄνδρα παλαιότερον,  
 ἤδη λευκὸν ἔχοντα κάρη πολίων τε γένειον,  
 θυμὸν ἀποπνεύοντ' ἄλκιμον ἐν κονίῃ,  
 αἵματόεντ' αἰδοῖα φίλαις ἐν χερσὶν ἔχοντα— 25  
 αἰσχρὰ τὰ γ' ὀφθαλμοῖς καὶ νεμεσητὸν ἰδεῖν,  
 καὶ χροὰ γυμνωθέντα· νέοισι δὲ πάντ' ἐπέοικεν,  
 ὄφρ' ἐρατῆς ἠβῆς ἀγλαὸν ἄνθος ἔχηι,  
 ἀνδράσι μὲν θηητὸς ἰδεῖν, ἐρατὸς δὲ γυναιξὶ  
 ζωὸς ἑὼν, καλὸς δ' ἐν προμάχοισι πεσών. 30  
 (Tyrt. 10.21-30)

というのも実際、次のようなことは恥ずべきことだからだ、年寄りが前線にあって死に若者の前で倒れることは、もう髪も髭も白く強固な気概を砂に吐き出し、血塗れの恥部を自分の手で掴んで（目にするも恥ずべき、見るも憤るべきことである）、そして、肌を剥き出しにして。しかるに若者であればすべてが見栄えがするのだ、愛すべき若盛りの輝かしい花盛りの時期にある間は、生きていても男たちからは見るに驚嘆され、女たちには情欲の対象とされ、前線で死んだとしても立派なのだから。

従来、研究者たちは、以下に示す三つの立場のいずれかを採ってきた。すなわち、(1) テュルタイオスはホメロスの当該詩行を踏まえて自らの詩作品へと改作した；(2) ホメロスにおける 69-76 行はテュルタイオスの当該詩行からの竄入であり削除すべきで

\*4 Richardson, p. 113, ad vv. 66-76. cf. bT 71-3 δοκεῖ τοῦτο προτρεπτικὸν εἶναι μᾶλλον ἐπὶ θάνατον ἢ ἀποτρεπτικόν... (bT のテキストは、Erbse に拠る)。

\*5 cf. bT 71-3 ...καίτοι φαίνεται βουλόμενος πείθειν τὸν Ἔκτορα εἰσιέναι εἰς τὸ τεῖχος καὶ μὴ ὑπομένειν τὸν Ἀχιλλέα。

\*6 テュルタイオスのテキストは、West に拠る。

ある；(3) ホメーロスもテュルタイオスも叙事詩的伝統に属する説教的な詩文の一節を利用しており、ホメーロスはこれを異なる文脈に用いた\*7。

本論の目的は、これらのいずれが正しいのかについて結論付けることにあるが、まず、奇妙さの際立つ *Il.* 22.71–73 とりわけ 73 行について、対応関係にある *Tyrt.* 10.29–30 を参考にしてその意味するところを具体的に検討することから、考察を始めたい。

問題とすべき箇所を改めて引用し、比較してみよう：

πάντα δὲ καλὰ θανόντι περ, ὅττι φανήη  
(Hom. *Il.* 22.73)

ἀνδράσι μὲν θηητὸς ἰδεῖν, ἐρατὸς δὲ γυναιξὶ  
ζωὸς ἑών, καλὸς δ' ἐν προμάχοισι πεσών.  
(*Tyrt.* 10.29–30)

ホメーロスにおいては、直後の老人の無惨な死と対比させるためであろう、若者の死のみが言及されるに止まっているが、テュルタイオスにおいては、29–30 ἀνδράσι μὲν θηητὸς ἰδεῖν, ἐρατὸς δὲ γυναιξὶ | ζωὸς ἑών、すなわち「若者は、生きているときは国の男たち女たちから持て囃され……」という主旨の詩行が先行している。このため、テュルタイオスにおいて、後続する 30 καλὸς δ' ἐν προμάχοισι πεσών の主旨は、正確には「戦で死んでも国の男たち女たちから立派であると誉めそやされる」であろうことが理解される。ホメーロスにおいてもまた、99–110 行とりわけ 104–110 行における描写から、ヘクトールはこれを「国の男たち女たちから立派であると誉めそやされる」という意味に理解したであろうことが推測される。なぜなら、プリアモスとヘカベーの懇願を受けてヘクトールは次のように考えるからである。城壁に入ることはできない、というのも自らの向こう見ずのために兵士たちを殺してしまったので、**トロイアの男たちと女たちに恥じているからだ**、むしろ、戦いを挑んでアキッレウスを殺して戻って来るかポリスを護って**名誉の死を遂げる**かした方が遙かに得であろう、と：104–105 νῦν δ' ἐπεὶ ὤλεσα λαὸν ἀτασθαλίῃσιν ἐμῆσιν, | **αἰδέομαι Τρώας καὶ Τρωάδας ἐλκεσιπέπλους**, 108–110 ἐμοὶ δὲ τότ' ἂν πολὺ κέρδιον εἶη | **ἄντην ἢ Ἀχιλλῆα κατακτείναντα νέεσθαι**, | **ἢ ἐκεν αὐτῷ ὀλέσθαι ἐυκλειῶς πρὸ πόλλης**.<sup>\*8</sup> **そ**

\*7 三つの立場についての要約として、cf. de Jong, pp. 75–76, ad vv. 71–6; Richardson, pp. 112–113, ad vv. 66–76. なお、両者は共に第三の立場を採用している。

\*8 アンドロマケーの懇願に対するヘクトールの返答においても、これと類似した考えが示される：*Il.* 6.441–443 ἦ καὶ ἐμοὶ τάδε πάντα μέλει, γύναι· ἀλλὰ μάλ' αἰνῶς | **αἰδέομαι Τρώας καὶ Τρωάδας ἐλκεσιπέπλους**, | **αἶ κε κακὸς ὡς νόσφιν ἀλυσκάζω πολέμοιο**·

して、ヘクトールが「トロイアの男たち女たちに対する恥と名誉」という感覚を抱いていることを、ヘクトールに一騎打ちを断念するよう懇願するプリアモスもまた、理解しているはずである。ゆえに、73行においてプリアモスが言わんとするところは、およそ次のようなものとなるであろう：「なるほど、若者ならたとえ戦死して辱めを受けるとしても、国の男たち女たちから立派なことであると誉めそやされる。お前もそのように考えているのであろう（。だが、それはとんでもない思い違いである）」\*9。

しかしながら、一騎打ちに気負い立つ息子を諫めるのに上記のような説得をわざわざ試みなくてはならないのだとしたら、むしろその背景には「若者であればたとえ戦死して辱めを受けても国の男たち女たちから立派であると誉めそやされる」という固定観念に英雄たちが縛られていた、という状況があったとすべきであろう。すなわち、プリアモスには、ヘクトールに説得を試みるために、まずこうした人口に膾炙した固定観念を自らの文脈に即して入念に覆してみせる必要があったのであり、私は、長らく場違いな印象を与えてきた当該の箇所意義もまた、このような前提において理解されるべきなのではないか、と考えるのである\*10。

そもそも、当該詩行の前後を見渡すと、71-73行を含む56-76行にわたるプリアモスの台詞の全体が、テュルタイオスの一節に窺うことができる若者に戦いを勧める詩文の一節を、自らの文脈に即して入念に覆えそうとしているように思われるのである。すなわち、*Il.* 22.56-59において、プリアモスは、「戦わずに城壁に入れ。命を惜しんで国の男や女を助けよ。年寄りの私を憐れんでくれ」と説得を始めるのであるが、これは、*Tyrt.* 10.15-20における若者に対する鼓舞、「踏み止まって戦え。戦いを挑むときは命を惜しんではならない。年寄りを取り残して逃げてはならない」またはそれに類する表現を念頭に置いているように思われるのであり、また、*Il.* 22.60-71において、プリアモスは、「(ヘクトールよ、もしお前が討ち死にすればトロイアは陥落し、) 私は(、生きているうちは)、息子たちが殺され、娘たちが連れ去られ、物言わぬ幼子たちが地面に叩き付けられ、妻たちが連れて行かれるのを、目の当たりにしなければならぬであろう」と続ける\*11が、これは、

\*9 もっとも、これは、bT 71-3の敷衍とはいささか異なる：*ὡς ἄρα καλὸν τὸ ἀποθανεῖν ὑπὲρ πατρίδος καὶ οἰκείων ἐπὶ λυσitteλείᾳ τῶν προσηκόντων, ἢ ἢ ἢ “πάντα δὲ τῆς αἰκίας καλὰ εἶσι τῷ θανόντι, εἴν ἐκ τοῦ ἀποθανεῖν καλὸν τι φανῆ καὶ λυσitteλές”。*

\*10 アンドロマケの懇願に対するヘクトールの返答の続きにおいても、こうした事実があったであろうことが窺われる：*Il.* 6.444-446 *οὐδέ με θυμὸς ἄνωγεν, ἐπεὶ μάθον ἔμμεναι ἐσθλὸς | αἰεὶ καὶ πρότισι μετὰ Τρώεσσι μάχεσθαι, | ἀρνύμενος πατρός τε μέγα κλέος ἦδ’ ἐμὸν αὐτοῦ。*

\*11 プリアモスがトロイア陥落に伴う災難を家族の崩壊という文脈に即して教え上げてみせることについて、cf. *Il.* 6.407-432。また、同様の災難を教え上げてみせることで、むしろ反対に戦いへと赴かせようとすることについて、cf. *Il.* 9.591-596 (de Jong, pp. 72-73, ad vv. 56-76)。とりわけ後者は、国の陥落に伴う災難の描写がホメロスにおいても正反対の文脈に用いられ得る、という意味において注目すべき例である。

Tyrt. 10.3-10 における若者に対する鼓舞の理由付け、「(若者よ、もしお前が討ち死にせず国が陥落したら、お前は、) 何にもまして嘆かわしいことに、愛する母と、年老いた父と、幼い子らと、娶った妻と共に、貧窮のなか放浪しなくてはならないであろう」またはそれに類する表現を念頭に置いているように思われるのである。また、プリアモスは、トロイア陥落に伴う災難として、さらに、自分が殺された後その遺体が犬に喰われ辱めを受ける様子まで描き出して見せるが、これは、71-73 行の「若者の立派な死」によって対比される 73-76 行における「老人の無惨な死」への導入となっており、しかも、この 73-76 行は、Tyrt. 10.21-27 における「戦いにおける討ち死に」としての「老人の無惨な死」\*12 またはそれに類する表現を、文脈に即して「敵に攻め込まれて討ち取られ飼い犬に喰い裂かれる」様子へと改変したものとなっているのである。

上記の考察を踏まえたとき、先に提示した三つの仮説の内、(1)、(2) が正しい可能性は低くなるであろう。なぜなら、(1) については、むしろプリアモスはテュルタイオスの一節に窺うことができる若者に戦いを勧める詩文の一節を前提とし、それを入念に覆そうとすることによって説得を試みていると思われることから否定されるべきであり、(2) については、もし竄入を疑うのであればその範囲はプリアモスの台詞の全体 56-76 行まで拮げなければならず、それにもかかわらず当該詩行の個別の描写は「トロイア陥落に伴う災難」から「老人の無惨な死」に至るまで文脈に良く適合していることからやはり否定されるべきだからである。ゆえに、私は、(3) の可能性——ホメーロスもテュルタイオスも叙事詩的伝統に属する説教的な詩文の一節を利用しており、ホメーロスはこれを異なる文脈に用いた——が選択されるべきである\*13、と結論付けるのである\*14。

(東京大学)

## 参考文献

- Erbse, H. ed., *Scholia Graeca in Homeri Iliadem*, Vol. 5 (Berlin 1977).  
 Gerber, D. E. ed. tr., *Greek Elegiac Poetry* (Loeb CL; Cambridge, Mass. 1999).  
 de Jong, I. J. F. ed., *Homer: Iliad Book XXII* (Cambridge 2012).

\*12 cf. Tyrt. 10.21 μετὰ προμάχοισι πεσόντα, 30 ἐν προμάχοισι πεσών.

\*13 ただし、テュルタイオスの詩は、本論における比較から推測される限りにおいて、ホメーロスが前提とした詩作品のかなりの部分を忠実に伝えている可能性があることも、認めなくてはならないであろう。

\*14 本稿作成にあたって、本誌編集主幹大芝芳弘先生ならびに二名の匿名査読委員の方々から数々の貴重なご意見・ご助言を頂いた。作成に関わって下さった三名の先生方に、この場を借りて感謝の意を表したい。むろん、本稿に残る不備は、筆者の責任に帰するものである。

- Leaf, W. ed., *The Iliad*, Vol. II, *Books XIII–XXIV* (Amsterdam 1971).
- Monro, D. B. and Allen, T. W. eds., *Homeri Opera*, Tomus I (OCT; Oxford 1920).
- Monro, D. B. and Allen, T. W. eds., *Homeri Opera*, Tomus II (OCT; Oxford 1920).
- Murray, A. T. tr., Wyatt, W. F. rev., *Homer: Iliad, Books 13–24* (Loeb CL; Cambridge, Mass. 1999).
- Richardson, N., *The Iliad: A Commentary*, Vol. VI (Cambridge 1993).
- West, M. L. ed., *Delectus ex Iambis et Elegis Graecis* (OCT; Oxford 1980).